

石巻専修大学 数理・データサイエンス・AI
教育プログラム(基礎リテラシーレベル)

自己点検・評価報告書

2025(令和7)年度

石巻専修大学 数理・データサイエンス・AI
教育プログラム推進専門部会



1 自己点検・評価の実施体制

石巻専修大学では、令和6年度以降入学者を対象として、これまで石巻専修大学で行ってきた情報教育を含めた初年次教育を拡張させ、Society5.0、AI時代といったデータ駆動型社会において、機械学習やAI技術を活用できる人材の育成を目的に、数理・データサイエンス・AI教育プログラム（基礎リテラシーレベル）（以下、「データサイエンス教育プログラム」という。）を新設した。同プログラムは令和7年度に以下の実施体制の下、自己点検・評価活動を実施した。

役割	委員会等
プログラムの運営責任者	数理・データサイエンス・AI教育プログラム推進専門部会
プログラムの改善・進化	数理・データサイエンス・AI教育プログラム推進専門部会
プログラムの自己点検・評価	数理・データサイエンス・AI教育プログラム推進専門部会

2 自己点検・評価の方法と点検・評価項目

自己点検・評価に際しては、「データサイエンス教育プログラム」の質向上の観点から、主に学生アンケートを用いて評価・点検を行った。

【学内からの視点】

- (1) データサイエンス教育プログラムの学修成果について
- (2) 学生アンケート等を通じた学生の内容理解度について
- (3) データサイエンス教育プログラムの履修状況の把握と改善について

3 自己点検・評価結果

【学内からの視点】

- (1) データサイエンス教育プログラムの学修成果について

この度、本学では本プログラムにおける教育の質向上を図ることを目的に、令和7年12月1日（月）から令和8年1月23日（金）までの間、学生アンケート調査を実施し、学生の学習成果を測定した。アンケート対象者は、本プログラムを受講した令和7年度入学者とした。対象学生275名（前年度261名）のうち、189名（前年度150名）が回答しており、回答率は69%（前年度57%）であった。学生の学修成果を測定するに際して、①

【意欲】②【理解度】③【成長実感】④【推奨度】⑤【希望】の5つの観点から把握・測定をし、本専門部会にて数理・データサイエンス・AI教育プログラム（リテラシーレベル）の評価・改善を行っている。

- (2) 学生アンケート等を通じた学生の内容理解度について

上述の学生アンケート調査では、学生の【理解度】を確認するために、以下の設問を

設定した。設問 2：「『情報活用法Ⅱ』を受講することで、データ・AIによって、社会および日常生活が大きく変化していることを理解できた。」設問 3：「『情報活用法Ⅱ』を受講することで、「数理・データサイエンス・AI」が、今後の社会における「読み・書き・そろばん」に相当することを理解できた。」設問 4：「『情報活用法Ⅱ』を受講することで、今のAIで出来ることと、出来ないことを理解できた。」設問 5：「『情報活用法Ⅱ』を受講することで、AIを活用した新しいビジネスやサービスは複数の技術が組み合わさって実現していることを理解できた。」設問 6：「『情報活用法Ⅱ』を受講することで、データリテラシーを向上できた。」設問 7：「『情報活用法Ⅱ』を受講することで、個人情報保護法やEU一般データ保護規則（GDPR）など、データを取り巻く国際的な動向を理解できた。」設問 8：「『情報活用法Ⅱ』を受講することで、データ・AIを活用する際に求められるモラルや倫理、データ駆動型社会におけるリスク、個人のデータを守るために留意すべき事項を理解できた。」これらのうち、設問 3 と設問 7 を除くすべての設問で、肯定回答率が 80%を超える結果となった。

設問 3 については、肯定回答率が 72%（前年度 71%）となった。「読み・書き・そろばん」という表現が学生にとって聞きなれず、古い印象を与える可能性があることから、次年度からはアンケートの表現を検討する必要があると考えられる。

一方、肯定回答率が 67%（前年度 69%）に沈んだ設問 7 については、新入生には理解が難しい授業内容であることが判明した。この点については、次年度も引き続き説明の仕方など検討が必要な課題であると認識している。

学生の【推奨度】を確認するために設定した設問 10「この『情報活用法Ⅱ』の履修を、後輩や友人などのほかの学生に勧めたい。」については、肯定回答率が 80%（前年度 59%）となり、前年度から大きく上昇した。本年度入学者は本プログラムを高く評価していることが確認された。

設問 12 では、本プログラムにおける学生の評価を確認することを企図して、「『情報活用法Ⅱ』（「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム」）を受講して良かったと思う点を記入してください。」を設定した。任意項目であったものの、29 名（前年度 25 名）の有効回答数を得ることができた。

学生からフィードバックされた回答について確認した結果、「AI 等について詳しくなれた。」「パソコンの基本ができるようになった。」「グラフの作成などの技術が身についた」といった成長実感が読み取れるとともに、「AI が発達してきているこの時代で知っておく必要がある情報を学ぶことができた。」「AI によって人間社会にとって利点と被害があることがわかりうまく活用していくことが大事」といった数理・データサイエンス・AI 教育の必要性が十分に伝わっていることが看取できた。

なお、学生の【意欲】を確認するために設定した設問 1「『情報活用法Ⅱ』に意欲的に参加することができた。」については、肯定回答率の割合が 89%（前年度 91%）となり、学生が本プログラムに意欲的に参加していたことが確認された。

最後に設問 13 で『情報活用法Ⅱ』（「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム」）をより良くするために工夫できることがあれば記入してください。」を設定した。任意項目であったものの、5名（前年度4名）の有効回答数を得ることができた。学生からフィードバックされた回答は一部の学生からの声ではあるものの、本プログラムの授業内容に対して「どのように役立つのか説明不足だと感じた」、「難しいところはしっかり説明してほしい」、「2年次以降の研究でどのようなグラフや表を作成するのか説明があるとよい」といった声があがっており、本プログラムの趣旨の理解度の向上をどのように行うか検討の必要がある。

(3) データサイエンス教育プログラムの履修状況の把握と改善について

数理・データサイエンス・AI 教育プログラム推進専門部会において、全学的な観点から数理・データサイエンス・AI 教育プログラム（リテラシーレベル）の実施状況についての確認を継続的に行っている。本委員会では令和7年度実績に基づき、令和8年度の履修者数・履修率の向上に向けた計画を立案している。主に必修科目として設定されていない学科（令和8年度人間学部人間文化学科入学者、令和7年度以前人間学部人間教育学科入学者）において、引き続き、高学年での履修を促すことを予定している。

【学外からの視点】

(1) 外部評価者のコメント（要約）

本プログラムの認定は、基礎的な IT リテラシーおよび情報倫理を身につけたことを示す「公的なお墨付き」として一定の価値がある。提出資料およびプログラムの実施状況について確認したところ、前年度と比較して学生アンケートの回答率が大きく向上しており、評価の有効性が高まっていると考えられる。一方で、授業評価は単位取得の容易さや試験の有無といった要因に影響される場合があるため、アンケート結果の解釈には慎重さが求められる。

アンケート結果では「意欲」が前年度より微減しており、導入段階での動機付けに小さな課題がある可能性が示唆される。また、国際的動向に関する理解は肯定回答率が低く、難易度だけでなく伝達方法の工夫も含めて改善が必要である。さらに、設問 13 で指摘されているように、2年次以降の学修との連続性を明確化することも重要である。

実社会においては、依然として Word・Excel・PowerPoint 操作を基準とする企業が多いものの、現場ではデータ活用・AI 活用・情報倫理を含む総合的なリテラシーが求められつつある。このため、本プログラム修了は文理を問わず履歴書上で資格に相当する付加価値となり得る。また、企業では情報漏洩や SNS の不適切投稿などに対するリスク管理の重要性が高まっており、基礎リテラシーの担保は採用後のリスク軽減にも寄与する。

プログラムの認知度向上に向けては、大学および文部科学省による周知の強化が望まれ

る。さらに、学生の PC スキルや情報活用能力には個人差が大きく、就職活動の早期化やミスマッチによる早期離職が増加している現状を踏まえると、キャリア形成と情報倫理教育を結びつけた指導の重要性が高まっている。

SNS 投稿リスク、データ管理、報告の適切性、可用性と統制のバランスなど、社会人に求められる判断力・分別の育成はますます重要になっている。加えて、生成 AI の急速な進展に伴い、教育現場では不正行為が増加しており、学生本人の理解を適切に評価する方法の改善が求められる。AI 活用スキルと倫理・真偽判断力の育成を両立させる取り組みが必要である。

以上を踏まえ、急速に発展する社会の要請に応え続けるためにも、外部評価者の視点を取り入れながら継続的な改善サイクルを推進し、本プログラムのさらなる発展を期待する。

(2) 外部評価者の指摘点

- ① アンケート設問 3 : 「読み・書き・そろばん」表現の陳腐化
 - ・学生との感覚的なズレが生じているため、語彙の現代化
- ② アンケート設問 7 : GDPR 等の国際データ規制理解の不足
 - ・ケーススタディ等を活用した参加型学習への転換
 - ・学修内容と実生活及び社会事例の接続強化
- ③ 2 年次以降の学修とのつながりが不明瞭
 - ・学修の連続性 (カリキュラム・マッピング) の再設計が必要

エスアンドエフ・アクティブライフ 代表取締役 沼田 尚 氏

以 上